

皮心伝心

皮膚科診療は、謎解きゲーム

私は子どものころ、なぞなぞやクイズが大好きで、アメリカを横断するクイズ番組など夢中でみていました。今はテレビに向かって声を出して答えてしまうと家族に白い目でみられています。標準的な治療をしていて治らないときに、思いがけない患者さんの生活習慣が皮膚症状の悪化要因となっていることがあります。患者さんにとっては当たり前のことなので、皮膚症状に関連しているとは思ってもよらず、具体的に聞き出さないと原因にたどりつけないことがあります。いくつか私の経験を紹介します。

ステロイドの内服をしても効果がなく、びらんが続々と出てくると紹介された80歳の男性患者さんは膿疱疹性湿疹でしたが、ゴボウを洗うたわしを使って、頭皮も含めて全身を洗っていました。たわしを使っていたことは家族も気がつかず、長年の習慣だったそうなので、そのために症状が改善しないとは思いませんでした。

また、女性の患者さんで、ステロイド外用薬で下腿の湿疹が治らない原因が、カミソリでムダ毛の処理をしている剃刀負けのことが結構あります。ステロイドを毎日塗っていたためか、体毛は太くなっていて、どうしても気になって毎日剃っていた方もいました。

抗菌薬の治療が奏効しない頭部全域に多発性毛包炎が生じていた50歳の男性は、洗髪用のシリコンのブラシで強く頭皮をこすって、膿疱をつぶして洗っていました。

夫の頭皮の湿疹に妻が丁寧に処方されたステロイド外用薬を毎日塗っていてステロイド皮膚炎を生じていた方も複数経験しました。夫婦仲が良いことが原因でした。

また、皮膚症状の原因にたどりつくには、流行も知っておく必要があります。古い話ですが「紅茶きのこ」で蕁麻疹が出たり、インパクトのあるテレビコマーシャルで爆発的に売れた化粧品で接触性皮膚炎患者が急に増加したり、頸部や手首の皮膚炎患者が急に増えたと思ったらフリース素材のジャケットが流行っていたりしました。最近気になるのは、衣類やタオルの洗濯で使う柔軟剤のコマーシャルが多いことです。全身が痒い患者さんには、柔軟剤を使っているかどうか聞いてみてください。

医師同士の雑談や、テレビやファッション雑誌などから、もしかしてこれが原因かも……と気がつくことがあります。薬だけが治療ではありませんから、まさかそんなことをしていたなんて……ということもいろいろとあるものなので、患者さんの皮膚を眺めながら、しつこく聞いて、謎を解いてみてください。

植木 理恵

(順天堂東京江東高齢者医療センター 皮膚科科長)